



季節を知ったら  
暮らしが楽しくなった

―第二四三号―

大寒 だい かん

一月二十日

## 注連を切る

巨大な注連縄しめなわが大蛇のように横たわります。それを目掛けて太刀たちが振り下ろされ、見守る群衆が一、二、三…と数えていきます。五十五回目でようやく両断にしました。

志摩市安乗岬あのりの安乗神社で毎年一月十日に行われる「注連切り神事」。「しめきり」という言葉に物を書く人間としてはどうしても反応してしまいますが、注連縄を両断することを「注連切り」というのです。神聖な場所をほかの場所と区別するために張る注連縄。それを切るという行為はどのような意味があるのでしょうか。

伊勢市高向たかぶくの御頭神事おかしらや志摩市波切なきりの正月行事でも注連縄を太刀で両断にしますし、そのほかの地域でも獅子舞の最後に切り払いと称して太刀で四方を切る所作を行うところもあります。これらには、これまで閉じていた聖域を切り開くという意味があるとも考えられています。安乗神社の場合は、注連縄の長さは二十メートルあまり、太刀が振り下ろされる巻藁まきわらは直径一メートル三十センチほどに上ります。なぜこれほど大きいかというと、大蛇に見立てられていたからです。悪疫を象徴する大蛇を切って、退散させるということになるのでしょうか。

この神事で驚いたことがあります。一つは、注連を切る太刀が本物であること。そのため、警察官が立ち会いのもと行われます。そして、注連切りの前に行われる獅子舞の際に、天狗面を被った男児が参拝者の頭を次々に扇で叩いて回ります。大人も子供も、なかには叩いてと頭を出す人もいるほど。私も叩かれました。なんでも叩かれると頭が良くなるのだとか。志摩の岬で行われた正月を締めくくるお祭りは終始、笑いが絶えませんでした。一年で最も寒さの厳しい寒中に祭りでわくわくするのも、寒さを乗り切る秘訣だと思ったのでした。

文 千種清美

